

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷六十第

行發日一月四年二十正大

論叢

納稅義務者としての内藏 法學博士 神戸 正雄
 價値の類型と個性 法學士 恒藤 恭
 モン派の社會改造哲學及び連帶思想 文學博士 米田庄太郎
 基督教文明の發展概論 法學博士 財部 靜治

時論

天然資源の國際的開放の原則 法學博士 戸田 海市
 産業組合中央金庫に就て 法學博士 河田 嗣郎

說苑

婚姻年齢の統計的研究 經濟學士 岡崎 文規

雜錄

失業保險制度の推移 法學士 一戸 二郎
 生産者及び消費者としての露西亞 經濟學士 藤野 靖
 世界的貨幣問題とカッセル 教授の學說 經濟學士 小川福太郎
 獨逸高等官の生計費 經濟學士 岡崎 文規
 マックス・ウェーバーの論文集 法學士 山口正太郎

世界的貨幣問題とカッセル 教授の學說

小川 福太郎

歐洲大戰の終結以來、世界の經濟は收拾すべからざる状態に陥つてゐる。世界全體が一の有機體の如くになつてゐる今日に於ては、他國に致命的打撃を與ふことは結局相互の災厄を招く基であると云ふ事が、諸國に於て深刻に經驗せられつゝある。そこでどうしても歐洲の經濟

を復興させなければならぬ事となり、是に對して幾多の方策が提議せられ、理論上にも實際上にも討究の對象となつてはゐるが、何分、其の範圍が廣汎で而も其の中に多くの重大問題が互に錯綜してゐる。従つて其等の問題の中、第一に何から、先づ手をつけて行くがよいか、第二に各個の問題に就いて、如何にすれば最も適當であるかと云ふ事に關して幾多の議論が存してゐるが、其中で『歐洲の經濟的復興を實現せんがためには、各國に依りて其の通貨價値の安定を得る事を其の必須的要件とす』とは昨年五月のゼノア會議の財政委員會に於ける決議の第一に置かれてゐるものである。蓋し、歐洲現時の危機の基く所が主として貨幣價値の不安定、換言すれば其の購買力が絶えず變動する事に存するは明かなる所であつて、此の購買力の變動が爲替の不安定を惹起する有力なる一原因となる事は亦争ふ事が出來ない。

かくの如く歐洲經濟復興問題と離るべからざる關係を有して居る所よりして、貨幣問題は既に千九百二十年のアルツセル會

議に於ける主要の論題となつたのであるが其後局面の變れる此問題に更にゼノア會議に於て多くの論議を醸す事となつた。而して此兩會議に出席せる多くの論者の中に於ても、瑞典のカッセル教授の意見は有力なるものとして認められてゐる、従つて其賛成者も多いが又反對者も少しもせない。我國に於ても教授の所謂「購買力平價説」に就て最近山崎博士の詳細なる紹介及批評があり、曾つては高田博士の批評があつた。

近頃、佛國のシヌユー氏「世界的貨幣問題とカッセル教授の學說」といふ題で一文を發表して、教授がブルツセル財政會議の要求に應じて千九百二十一年に書いた「世界の貨幣問題に關する意見書」と、同じ問題に就て千九百二十一年十一月廿七日の Manchester Guardian Commercial に發表した「第二の意見書」に基いて、左の事項に就て考察を試みてゐるが、是又他山の石となるものがあらうと思ふ。

(一) 目下救済の必要ある状態の因をなせる、貨幣に關する最近の主要事實。

(二) 此救済の目的を達する爲に提唱されたる方策、就中カッセル教授の學說。

(三) 是等の説の發表又は適用後の反動的事實、并びに歐洲の現状に於ての安定政策の可能性。

そこで私は、氏の所説を聞くと共に、之等の問題が如何に發展して行つてゐるか、及び之に關聯してカッセル教授のいふ所に就て、少しく窺ふ事にする。

一

カッセル教授が前記第一の意見書に於て、戦時及び戦後に生じた所の經濟上の變化の最も顯著なる特徴として擧げてゐるものは、通貨の非常なる膨脹、使用し得べき生産物の減少、及び物價の過度なる騰貴である。之を簡單に説明すれば通貨の膨脹は、戦前諸國間の貨幣關係の基礎となり、且又、其關係を殆んどコンスタントに維持して居つた所の金本位制が、多數の國に於て拋棄せられて、他國の金本位又は紙幣と一定の關係なき紙幣が是に代はる事となつた爲めである。次に紙幣其他の支拂手段が非常に増加したにも拘らず貨物は是に伴ふて増加せなかつた爲めに、物價が非常に騰貴する事となつた。而も此貨物の減少は通貨の膨脹に比すれば其程度は低いが、又種々の理由に依て、國により非常に異つて居た。而して特に注意すべきは、共通の金屬本位が拋棄せられ、各國が特有の流通貨幣に依頼してからは、其國內に於ける物價平準が外國の物價平準と全く無關係のものになつた事

1) カッセル教授の購買力平價説に就て(經濟學論集第一卷第二號 p.55)

2) 爲替價値に關するカッセル説に就て(經濟論叢第八卷第二號 p.138)

3) Le problème monétaire mondial et la théorie du professeur Cassel, par C. T. Gignoux. (Revue d'Economie Politique: Septembre-Octobre, 1922)

4) Memorandum sur les problèmes monétaires du monde

5) Second memorandum

である。

かういふ成行であるからして、ブルッセル會議より其意見を徹せられたる諸學者の共同宣言の中にも「何れの所に於ても信用及び通貨の膨脹を出来る丈早く停止せねばならぬ」といふ一句が最初に存してゐる。

通貨收縮政策實行の結果 千九百廿年には、通貨は諸國に於て膨脹の勢を續け、卸賣物價の一般平準は大部分の國々に於て最高點に達して居たが、翌年の初より物價は急調子の下落をなすに至り、而も最近迄繼續して居る。若干の經濟學者就中カツセル教授は、此物價下落の原因を、自然的の力といふよりも、寧ろ諸國政府が物價を下落せしめ其れに依て貨幣の本位に一層高き價値を與へしめんとする政策に歸してゐる。元來此通貨收縮政策なるものは、世人が正常なるものとして考へ慣れて居た所の、戦前の金平價及び物價平準に復歸せしめようとする計畫を以て行はれたものであるが、其結果は世界の繁榮といふ見地よりして、人々の期待せる所と全然

反對なものに見えるのである。蓋し物價の絶えざる下落は生産の恐慌及び失業を惹起したと共に、通貨收縮は一般的不均衡を増大するに過ぎなかつたのである。

北米合衆國は千九百二十年五月に組織的なる通貨收縮政策を開始したが、之を國內の見地よりするも、その好結果を生じなかつた。蓋し、多くの國々に於て同様の現象あるべしとの豫想よりして、世人が一般に消費を制限したと同時に、物價の絶えざる引下は滿期される貸付の償還を夥しく不可能ならしめて所謂 *loosen credit* として固定せしめ、遂に是が米國の重大なる不安の原因となるに至つた。一面に於て米國の貨幣政策は、自國の貨幣を戦前の弗との平價に回復せしめん事に、或は少くも其開きの増大せざらん事に無慮せる、他の國々の貨幣政策に大なる影響を及ぼした。特に英國が磅の價値を高め之を出来る丈弗に接近せしめんとせる長い間の努力は人の知る所である。而して他の諸國も之に倣ふたが何等の成功を見ない、何となれば弗の對内價値は他の貨幣の對内價値よりも急速に回復し、かくて兩者の開きは些ども減少せなかつたからである。

以上の如き通貨收縮の競争は諸國の貨幣の相對的價値從つて其相互間の貿易状態の安定を妨げるが如き結果を生ずるに過ぎなかつた、加ふるに、若干の國々は多少共、斷乎たる政策を實

1) Bruins, Cassel, Gide, Pantaleoni, Pigou.
2) E. M. Friedman : International Finance and Its Reorganization 1922. p.620

行したのに他の國々は通貨膨脹を尙も甚しくしたといふが如き事實よりして、此狀勢は一層錯綜する事となつた。

金準備の不公平 更に又、事實上、右の結論を強むるに足る一事情がある。通貨收縮政策の本質的に又最後の目的として企圖する所は金本位に復歸する事である。然るに戦争の始め以來、歐洲の金準備は中立國其他歐洲外の諸國へ移動し、千九百十三年に世界の金準備の七十パーセントを所有するたる歐洲の諸銀行は今日僅かに四十三パーセントを有するに過ぎない。反之米國は巨額の金を回收し準備銀行の金所有額は、戦争中の移轉を別として八億一千萬弗に増加した。而も此巨額の金は一度入れば最早外に出ない事となり、且つ此制限的精神が、一様な嫉妬を以て自國の少き富を見守つてゐる他の國々に擴がる事となつた。従つて諸國戦前の金平價は非常に差異あるものとなり、其順序は、流通以上の巨額なる金準備を保有せる中立國に始まり、準備の減少せる聯合諸國之に次ぎ、最

後に紙幣しか無き東歐洲の國々となる。上に簡單に其變遷を示したる通貨收縮政策が分散的に行はれたるは、實にかゝる不公平なる状態に於てであつた。

二

徹底的通貨收縮策の是非 シ氏は曰く、上述の諸事實は夫自身意味ある事であるが、通貨收縮を組織的に行はうとする論者は、是等の事實の發展を以て究極的のものでないと云つて異論を唱へるであらう。然し完全に紙幣制度となり従つて以前の本位の消失した國は勿論、もつと都合のよい國々でも、收縮政策により、重大なる困難なしには決定的の結果を期待する事は不能である。且又、カッセル教授も云へる如く、通貨收縮は國家の公債の負擔の上に重大なる影響を及ぼす事となる。即ち國家が價值の下れる貨幣で負擔した債務が、貨幣價值の上る事によつても増大する事となる、が故に、過度の通貨收縮は財政の破壊と國家破産を來す事となる。乍然若しかゝる考が人を惹付けるならば、そは特に

道徳的理由に因るものである、即ち通貨收縮は均衡に復歸する事及び健全なる財政状態の徵候であるからである。然し如何に通貨收縮が有利であるとしても經驗の教ふる所では、如何なる時如何なる處に於ても、それのみを以てしては紙幣濫發の弊害を矯正する事を得ないのである。

金準備増加案　ジ氏は更に次の如く論じてゐる。戦前の貨幣本位に復歸する事は、金準備と流通紙幣との關係の改善と關聯してゐるのであるから、假令、流通紙幣の非常なる收縮は不可能であり不都合であるとしても、金準備の方を増加させる事は出來ぬであらうか、といふ論者があらう。

曩に世界に於ける金の状態並びに其分配の不平等といふ事が、かゝる方法の出發點を非常に危険なものにした事を述べたが、凡ての貨物と同じく金は最も高く支拂はれる國即ち米國に向ふのである、ヴァンダーリップ氏が、歐州の幣制復興の爲めに、米國が歐州へ金の貸付をなす

事を勧めてゐるが、そんな人爲的な方法を試みても駄目である。蓋し此問題の解決が出來、送還された金が歐州に止まる爲めには、歐米間の貸借關係が全く均衡にある事を要するであらう。然るに米國の貸借勘定はアブノルマルに三十億法の貸方になつてゐる、之を建直すには、米國が其輸出額を輸入額よりも少くする様に決心せねばならぬ。所が純粹なる保護貿易的精神の表徴たる新關稅率が最近實施された事は、かゝる事が米國の意思でない事を充分に示してゐる。

更に世界の金の貯藏量が補充的に増加する事も當にしてはならぬ。貴金屬の産額は戦争中に減少したのである。假令、カッセル教授の定めてゐる最高額八千萬磅に達するとしても、現在の消費には勿論、歐洲の金貯藏量の回復には猶更不充分であらう。加之、この貴金屬の稀少といふ事が其價格を騰貴せしめ、爲替の下落せる國は益々金に近付き難くなつてゐる。此事情よりして、教授も過度なる通貨收縮を非難し、以

前の金本位回復の目下不可能なるを注意するに止らず、其れに基いての貨幣改革が假令一時的でも利益であるといふ事には異議を唱へてゐる。

價值切下問題及び購買力平價説 さてカッセル

教授の說の要點は

爲替の安定を求むるには、可及的急速に金本位に復歸する事を要する。それには、卸賣價格指數の比較に現はるゝ所の諸國貨幣の國內購買力に基いて建てられたる、新國際的平價に従つて、各國貨幣單位の價值切下を行はねばならぬ。といふのである。

教授は曰く「科學的に決定されし紙幣本位の上に成立し得る貨幣制度建設の目的を有する一切の努力が、假令それが理論的基礎に立てるものでも、少くとも現在では破滅してゐる程、金に復歸する希望は一般的であり又強烈である。然し此點は自明であるとしても、それだからといつて新なる金本位は戰前の本位と同一なる、金との比價に依らねばならぬといふ事は必然的

に生じて來ない」と。

是で見ると、戰前の金本位を復活させる事は出來ないが、矢張金本位であつて、只以前よりも比價の低きものを採用する事になる、即ち所謂價值切下(Depreciation)を行ふ必要が生じて來る事になる。そしてゼノア會議の財政委員會も是と同様の意見を採用してゐる。

決議五、現在に於て全歐羅巴諸國の採用の同意を得べき唯一の共通本位は金なりとす。

決議八、第二の措置は貨幣單位の金價格を決定し且之を確立するにあるべし。右措置は各國經濟事情の許す場合に於てのみ、之を採用することを得べし。蓋し各國に於て右措置を採用するに際しては、従前の金平價を採用すべきか、又は當該時に於ける貨幣單位の爲替相場と略一致する新平價を採用すべきかの緊切なる問題を決定せざるべからざればなり。

次に教授は曰く「各國は自國の貨幣に幾何の價值を與へんとするか、換言すれば物價を安定せしむる爲め標準如何を決定せねばならぬのであるが、物價及び各種實銀の變動が不規則であるため、標準を運用する上に困難が生ずる。従て卸賣價格を安定せしむるために採用すべき標

準は、賃銀其他の生産費の要素たる價格に動搖を來す事の最も少い様に、生産物の價格と其生産費との間の均衡が建てられるものでなければならぬ。故に、是が爲めには特に一國の生産的活動の監督及び賃銀の調整に就て、極めて周到なる政策を行ふ必要がある。

さて、以上の如き教授の説に對してジ氏は「凡そ一國が容易に其物價を安定せしむる事を得るとし、或は又此問題が解決されたものと假定して、其上に尙、多少監督せらるゝ經濟的活動の働きに依て、物價が長期間に亘つては、安定してゐる事を経験上より確め得るとするも、此の物價の安定が同時に其國の貨幣の爲替價值に及ぶといふ事が證明されたであらうか。それがたゞめには、爲替相場と貨幣の國內購買力との間の此密接なる關係が、可なり精確に證明される事を事實に就て確めねばならぬ」といひ千九百廿二年八月に於ける英佛二國の卸賣物價指數が夫々、三三〇・五と一五二・三即ち二・一六七と一との比であつて、是に「二國の通貨が膨脹すれ

ば、新爲替相場は、舊相場に兩國の通貨の膨脹率間の商を乗じたものに等しい」といふ、教授の購買力平價説の原則を適用すれば、磅の相場は五四・六四法¹⁾となる事を示し、八月に於ける磅の平均相場が可成り是に近き五五・七法となる事、更に千九百二十一年八月より二十二年の七月迄の各月に就て同様の方法を試みたるものが、實際の平均相場と近似してゐる事を數字で示してゐる。そして曰く「是で見ると確かに差が残つてはゐるが、此差は爲替手形の増減に事實上伴ふ投機とか、或は又貿易上の貸借の増減とかに歸因する事が出来る。然し全體に於ては原則は證明されたものと思はれる」と。

尙是に續いてジ氏は、キーンズ氏の『稍々無理な又不正確なる形式を以て、カッセルの説は、運賃、關稅其他の附加税が一の貨幣の對外購買力と對內購買力との間の、換言すれば其爲替價值と其購買力平價との間の、精確なる關係を妨げるといふ事實を充分考量して居ない様である。此事情よりして、此説は國際貿易品に關しての

1) 25.22法 (即ち舊平價) × 2.167 = 54.64法

み適合し、一般物價指數には基かない」との批評に對して「貨幣の對内價值と對外價值との均

衡を覆す所の原因には、運賃や關稅の變動よりも尙重要なるものがある。其中には僅かの限度に於て投機があり、特に通貨膨脹がある。乍然既にカッセル其他ピノア會議の諸學者に從つて、爲替の安定從つて其安定の爲に平價説を實際に應用する事は通貨膨脹を中止し、其上、通貨收縮を始めた國でなければ行ふ事が出来ない事を説明した。尤も論者は物價が爲替に影響するのではなく爲替が物價に影響するのであると主張するのであるが、併し例へば獨逸の如く、貨幣に就て無政府状態に陥れる國を除いては、此要素は非常に限りのあるものと考へる」と。

かくの如く、ジ氏は購買力平價説を大體承認して居り、前述のブルッセル會議に於ける諸學者の共同宣言の中にも、「爲替の水準は諸國の國內流通々貨の相對的價值に一致せんとする傾向を有す」の一句がある。乍然、貨幣の購買力と爲替相場との關係の問題は、其前提たる通貨と

一般物價との關係の問題と共に、今後尙研究を要するものであらうと思ふ。

次に價值切下の問題に就て、論者はゼノア會議の財政委員會に於て、諸貨幣の正常含金量を其現在の價格にて調整する事が、爲替の安定を生ずるには、それと同時に金が自由に流通し、豫算の均衡、貿易上の貸借の均衡が再び建てられねばならぬといふ事を注意したのであるが、尙、價值切下を行はれる虞れのある貨幣の所持者は、すべて其貨幣を俄に市場に投出し、それがため混亂を生じ遂には、折角の規定を臺なしにするかも知れぬので、ゼノア會議は此不都合を、追つて、國際財政協約によつて防ぐ事とした。即ち、

各加入國は上述せる基礎に從つて建てられたる金平價を採用する事を約束し、且其金平價を維持する爲に公認されたる價格を有する充分なる準備を、自國にも他の加入國にも盛き、其上に、金平價に一定の價值を加へたるものより遠ざからない相場にて、他の加入國宛の爲替手形を、要求に應じて賣買する事とした。尙可成り曖昧なる是等の規定は後日開かるゝ發券銀行會議に於て明確にせられる事になつてゐる。

- 1) Manchester Guardian Commercial April 20, 1922.
- 2) E. M. Friedman : Ibid. p.620
- 3) ピノア國際經濟會議決議九及び十一參照

ジ氏は最後に述べて曰く「此發券銀行會議の結果はどうあらうとも、價値の切下の問題にしても如何なる安定の問題にしても、現下の世界の狀態では、解決し得られるものは考へられぬ。此仕事は如何なる大國の力にも合はず又便宜ともならぬ。或國は通貨膨脹の最中で斯る政策を考へる事さへ出來ず、又通貨膨脹を差控へた國は經濟恐慌又は國際財政上の困難が解決されない限り、其れ以上に進む事が出來ないであらう。又凡ての國が其相互の債務の範圍に就て正確に決定せられて居らず、授受し得る具體的なる支拂方法を知らない限りは、ゼノア會議其他に依て提唱されたるが如き協同的行爲に出づる事は不可能であらう。尙又負債及び賠償金の支拂を金にて命する時は債務國が金を求むる事に依て、必ず金の一般的騰貴を來し、此事が新しき平價を求めてゐる國々の狀態を面倒ならしむると共に、凡ての金債務の負擔が重くなり、債務者たる私人自身の支拂能力をも擾亂する事と

なる。是等の事を考ふる丈でも、此擾亂的分子を除き、是に代ふるに他の一形式を以てする必要がある、そは即ち貨物にての支拂でなければならぬと思ふ。

次に考へなければならぬ事は世界に於ける保護貿易政策の一般的發達であつて、此政策が國際的債務の精算を面倒ならしむると共に、更に一般的には、貨幣に關して希望せらるゝ計畫の完成を妨げる事は疑ふ餘地もない。貨幣の安定は豫め貸借勘定の均衡がなければ生じ得ない。然るに此事丈でも甚だ面倒であつて、それを詳細に互つて組立てる事は、如何なる政府の意の儘にもならない。之を要するに國際經濟關係の自由といふ事が、必ず爲替の安定に先立たねばならぬものである。」